な

舌音にして單子音の一つ。

〔一〕其物事の符號に附けたる稱へ。●名稱。〔二〕實名。……通稱、字、號などに對して。○「姓は本居、名は宣長、鈴の屋と號す」〔三〕通稱。……姓に對して。〔四〕名の高き事。●高名。●名聲。●名譽。〔五〕文字。

な（名）　物に添へて食ふ物。野菜魚肉類の總稱。……是より別れて魚と菜との稱へと爲る。

な（名）　魚（名）　うを。●肴。

な（名）　菜（名）　〔一〕野菜の總稱。〔二〕特には葉を漬物などにする野菜。

な　汝（代）　なんぢに同じ。○記「汝を（置）きて男は無し。汝を（置）きて夫は無し」

な　儺（名）　〔一〕追儺の夜逐ひ拂はるゝ惡鬼。○夫木「舊年といふなをやらふ音高み春を厭ふと人や聞くらん」〔一〕追儺に同じ。○江次第「儺の聲」

な（助動）　禁止の詞。勿れの意。〔一〕動詞の後に置く。○「人に語るな」「道に迷ふな」〔二〕動詞の前に置く。……此な文字を置くと同時に動詞の後にそ文字を用ふる事もあり。又略するもあり。○古今「戀しくは見ても忍ばんもみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風」萬葉「妹があたり我袖振らん木の間より出で來る月に雲なたなびき」

な（助動）　んと同じくして願ひの意味を帶びたる詞。○萬葉「あそびくらさな」「もみぢ手折らな」「いざ結びてな」「君によりなな」

な（感）　意味の切れたる後に置きて感情を強め又は長むる詞。○拾遺「秋風に四方の山よりおのがじゝ吹くに散りぬる紅葉かなしな」大鏡「をり〳〵の御和歌などこそめでたく侍れな」

なゐ　地震（名）　ちしんの古名。○定頼集「十月ばかり夜なゐいたくふりければ」

ないべん　內辨（名）　禁中節會の日の奉行を勤むる臨時官。●上卿。

ないち　內地（名）　本國。●本土。●國內。

ないぢん　內陣（名）　神社佛閣にて神體又は佛像を安置する場所。●內陣。

ないり 泥梨(名) 奈落に同じ。地獄。○平家「此度ないりに沈みなば」(佛教)

ないをん 泥洹(名) 涅槃に同じ。釋迦の入滅。○謠曲「ないをん雙樹の苔の庭」

ないおう 内應(名) 密に敵に應ずる事。●内通。△(動)—内應す。

ないがしろに (副) 〔一〕有れども無きが如くに。●自墮落に。●しだらもなく。○源氏「あやしき馬に狩衣姿のないがしろにて來ければ」〔二〕あなどりて。●輕蔑して。●無造作に思ひて。○空穗「世をないがしろに思ひて」……△(形)—ないがしろなる。

ないだいじん 内大臣(名) 官名。左右大臣の次に位して同じく政務に與かる役。……但し中古の初期頃には左右大臣より上に位して太政大臣と同じ程の役。

ないつう 内通(名) 内應に同じ。△(動)—内通す。

ないない 内々(副) ひそかに。●秘密に。(又)—内々に。△(形)—内々の。

ないらん 内亂(名) 國内に起りたる騷動。

ないむしゃうう 内務省(名) 現今の制。專ら地方の行政を掌る官廳。

ないくわ 内科(名) 内部の治療を專門とする醫術。

ないくわん 内官(名) 在京官。……地方官を外官といふに對して。

ないくわんれい 内管領(名) 鎌倉時代の執權職。

ないくう 内宮(名) ないぐうに同じ。

ないぐう 内宮(名) 天照皇太神を祭りたる社。伊勢の宇治にあり。●大神宮。

ないげ 内外(名) 〔一〕内と外と。〔二〕伊勢の内宮と外宮と。〔三〕内典と外典と。

ないふ 内府(名) 内大臣の異名。

ないこう 内訌(名) 内亂に同じ。

ないえん 内宴(名) だいえんに同じ。(源氏)

ないでん 内典(名) 佛書。經文。……佛家にて儒家老莊等の書を外典といふに對していふ詞。

ないき 内記(名) 官名。中務省に屬して詔勅を造る等すべて禁中の記錄を掌る役。大内記少内記の二等あり。●うちのしるすつかさ。

ないぎ 内儀(名) 他人の妻の尊稱。但し目上の人などのをば言はず。●妻君。●内方。●令室。●令閨。

ないけきょう 内教(名) 佛教。●佛學。○源氏「内教の御才さとり深く物し給ひけるかな」

ないけきょうばう 内教坊(名) 昔し禁中にて女樂を教へたる役所。老いたる女官雅樂寮より習ひて之を他の女官に傳習するものとす。

ないみょうぶ 内命婦(名) 五位以上女官の稱。……五位以上の官吏の妻を外命婦といふに對して。

ないし 内侍(名) ないしのじょうを呼ぶ稱へ。●掌侍。

ないし 乃至(副) より何々まで。○「五圓乃至十圓」

ないしどころ 内侍所(名) 〔一〕内侍司に同じ。〔二〕禁中にて八咫鏡を祀り奉る御殿。●賢所。〔三〕八咫鏡の一名。

ないしょう 内證(名) 〔一〕秘密。●内密。●内々。△(形)—内證の。(副)—内證に。〔二〕家の奥向。●勝手向。

ないしょく 内職(名) 本職の外にする仕事。●片手間。

ないじつ 内實(名) 内々の情實。●内情。

ないしんにょやしゃ 内心如夜叉(句) 心の内は鬼の如く恐るべきの意。(佛教)

ないしんわう 内親王(名) 皇女にて親王宣下のありたる御方。●内のみこ。●ひめみこ。

ないしのかみ 尚侍(名) 女官の名。内侍司の長官。

ないしのつかさ 内侍司(名) 禁中の禮式、後宮女官等の事を總べ掌る女官の役所。官吏は尚侍、典侍、掌侍、女孺の四等あり。

ないしのじょう 掌侍(名) 典侍の次に位する女官。

ないしのすけ 典侍(名) 女官の名。内侍司の次官。

ないじゅく 内處(名) 父母の親戚。(宗聽)

ないじゅ 内豎(名) 童髫にて禁中に使役せらるゝ給仕の如き役。

ないじゅどころ 内豎所(名) 内豎を監督する役所。其長を別當といふ。

ないひ 内屏(名) 内陣に同じ。

ないぜん 内膳(名) 内膳司の略。

ないぜんし 内膳司(名) 宮内省に屬して供御の御膳の一切の事を掌る役所。官吏は正、奉膳(ぶぜん)、典膳、令史の四等あり。●うちのかしはでのつかさ。

なばへ (名) 枝の長く直に延ぶる事。○夫木「蔦の居る井杭の柳なばへして芽ぐみにけりな春を忘れず」

なに 何(代) 疑問代名詞。○「何をか語る」「何にたとへん」

なに 何(形) 疑問形容詞。○「何人」「何物」「何事」

なに 何(副) 疑問副詞。〔一〕なんで。●いかで。●何として。○古今「春霞なにかくすらん櫻花ちるまなだにも見るべきものを」〔二〕人の言語に答へて一言問ひ返す樣に云ふ詞。○謠曲「何。身を投げ空しくなり給ひたるとや」

なにに (副) 何しに。●なんで。●何故。●何を以て。●何によりて。

なにほど 何程(副) いかほど。●どれだけ。●いくらばかり。

なにとぞ 何卒(副) 何としてなりとも。●どうか。●何分にも。

なにとなく 何と無く(副) 是と定まり事なく。●自然に。

なにとなう (副) 何と無くに同じ。

なにとて (副) 何の譯にて。●何の爲めに。

なにおふ 名に負ふ(句) 〔一〕事實の意味を名に附けて負ひ持つの意。後撰集に「限りなき名に負ふ藤の花なれば底ひも知らぬ色の深さか」

なには (名) 何い。●何やかや。……難波の地名に言ひ掛けて用ふる事も歌には常にあり。○方丈記「京のならひ何はにつけても」古今「津の國のなには思はず」

なにはがた 難波潟(名) 神樂の曲名。

なにはづ 難波津(名) 昔し小兒の習字の初歩に習ひたる歌。すなはち古今集の序にある「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」是なり。後世の「いろは」當る。○源氏「まだ難波津をだにはかぐしく續け侍らねば」

なにはのつぶらえ 難波乃都布良江(名) 風俗歌の曲名。

なにはぐさ 難波草(名) 蘆の異名。

なにはぶり 難波振(名) 上古雅樂寮の歌曲の名。

なにはゝめ 難波女(名) 難波の浦に住む女。○賴政集「貝踏むと汐干に立てる難波女が歸る蘆邊に迷ふ夕霧」

なにか (名) 何やかや。●あれやこれや。

なにか　（副）〔一〕何とて。●何故。●いかでか。〔二〕何なか。〔三〕人の言語に答へて例れ返すやうに云ふ詞。○蜻蛉「夜は明けぬるを人なご召せといへば。何か。まだ暗からん暫しとてあるに」

なにがし　何某（代）〔一〕其物事を態と判然せぬやうに云ふ詞。○源氏「或人北山になん何がし寺といふところに」（鞍馬寺の事）同「五つの何がし」（五障の事）〔二〕其人を態と判然せぬやうに云ふ詞。○源氏「何がしの阿闍梨そこに物する程ならば」〔三〕それがし。●私●拙者。○空穂「宮の御事は何がしが執り申しつる事にも侍らず」

なによりなにより　（副）何よりも優りて。○「何より以て有難う候」△（形）―何よりの。

なにそはワ　（副）何其れは。●何のために其れは。○新續古今「色も香も忘れし墨の衣手に何そはにほふ梅の下風」

なにぞのなにぞの　（形）何のに同じ。●いかなる。○宇治「なにぞの人にておはするぞ」

なになに　何々（副）他の文章を朗讀する時の讀み出しに言ふ詞。○謠曲「何々西谷の花。今を盛と見えて候ふに。など御音信にもあづからざる」（西谷以下は手紙の文句）同「何々中宮御産の御祈のために。非常の大赦行はるゝにより」（中宮以下は俊寛赦免狀の文句）

なにのなにの　（形）〔一〕いかなる。●何のための。●何故の。●何ものゝ。〔二〕何がしの。●某の。

なにくれなにくれ　あれやこれや。●種々樣々。△（形）―なにくれの。○源氏「山の座主何くれの僧たち」（副）―なにくれと。○源氏「御菓物何くれと谷の底まで堀り出でゝ」

なにぶんなにぶん　何分（副）何としても。●何卒して。

なにしなにし　（副）何故に。●何しに。●何とて。●風雅「山深く尋ねには來で櫻花なにし心をあくがらすらん」

なにしになにしに　（副）何としてか。●いかでか。○竹取「何しに悲しきに見送り奉らん」

なにしおふワなにしおふ　（句）なにおふに同じ。但し名にしといへばおはばとば文字を受くるが正格なれと轉じては「なにしおふ花の都の」など用ふるも常なり。

なにしかなにしかも （副） 何しに同じ。

（副） 何しに何しかに同じ。○萬葉「何しかもこいだく戀ふる時鳥鳴く聲きけば戀こそまされ」

なにも 汝妹（代） 姉妹を親しみ呼ぶ詞。●妻を親しみ呼ぶ詞。（古）

なにすれぞ 何爲（副） なんすれがに同じ。●なにしに。●何としてか。●いかでか。

なべ 鍋（名） 食物を煮る器。

なべ （副） なべにに同じ。●と共に。●と同時に。○萬葉「今朝の朝け雁がね寒く聞きしなべ野邊の淺茅ぞ色づきにける」

なべに （副） と共に。●と同時に。○六帖「夜を寒み衣かりがね鳴くなべに萩の下葉も色づきにけり」

なべて （副） 〔一〕總じて。●すべて。●概して。●引っくるめて。○枕「織物の色更になべて似るべきやうなし」〔二〕並べて。○古今「駒なべていざ見にゆかん故郷は雪とのみこそ花は散るらめ」

なべての （形） 通例の。●世間並の。●總體の。○拾遺「大方の我身一つのうきからになべての世をも恨みつるかな」

なべすう 並居（他動下二段） 並べすわらする。○枕「こゝらめでたき人をなべすゑて御覽するこそいと羨ましけれ」

など （助名） 〔一〕物事の主要なる物を擧げて其以下を略する時にいふ詞。○「庭に松櫻など植う」（梅竹などは此内にこもれり）〔二〕列ね擧げたる物事を總べて云ふ詞。○「酒肴などすゝむ」

など （副） 何とて。●何故に。●いかにして。

などりぐさ 名取草（名） 牡丹の異名。

などる （他動四段） 文字繪畫など一度書きたる線の上を同じやうに又塗る事。

などころ 名所（名） 〔一〕有名なる土地。●めいしょ。〔二〕其物の部分の名稱。○「兜の名所」「弓の名所」

などて （副） 何とて。●何として。●いかで。

なり 鳴（名） 鳴る事。●鳴る音。

なり 業（名） 家業。●生業。

なり 形（名） 物の形。●外形。●身の形。

なり 成(名) 貴人の來る事。○「お成」「お成道」「お成門」

なり 也(助動ラ變) (一)により。●である。●じゃ。●だ。○「地球は惑星なり」「今日は雨天なり」「旅なる人」(二)といふ。●と稱する。……但しなるより外には活用せず。○「樹正成なる人」「人間なるもの」(三)感情を強め餘情を示す詞。○古今「秋の野に人松虫の聲すなり我かと行きていざとぶらはん」

なりどころ 業處(名) 別莊。●別業。

なりはひ 生業(名) 生計の爲の業務。●渡世。●營業。●家業。●民業。●農業。

なりかぶら 鳴鏑(名) 鏑矢に同じ。

なりたち 成立(名) 成り立つ事。

なりたかし 鳴高(句) 聲高し聲ましと制する詞。○宇治「なりせいせんなりたかしといひて」

なりたつ 成立(自動四段) (一)物事の完備する。●出來上る。(二)組みたてられてある。●組織せられてある。

なりや 鳴矢(名) 鳴鏑の矢。(萬葉)

なりけり (助動ラ變) で有った。●ので有った。……しばく前文を説明するやうの時に用ひらる。

なりあがる 成上(自動四段) 急に立身する。

なりあふ 成合(自動四段) 調ふ。●整頓する。●完備する。○源氏「まだ稚なくなりあはぬ人を」

なりゆき 成行(名) 事の終り。●結局。

なりひさご (名) ひさごに同じ。瓢簞。

なりもの 生物(名) 菓物に同じ。

なりもの 鳴物(名) 樂器の總名。

なりせいせん 鳴制せん(名) 聲の聲しきを制止する詞。……なりたかしを見よ。

なぬか 七日(名) (一)七晝夜。(二)月の第七日。(三)佛葬祭にて人死してより七日目毎の法事。(四)七月七日。七夕祭の日。

なぬし 名主(名) 德川時代の制。今の村長の如きもの。●庄屋。

なる 生(自動四段) (一)出來る。●生ずる。(二)菓物の實を結ぶ。

なる 爲(自動四段) 形を變ふる。●變する。●移る。○「老となる」「里は野となる」

なる

成(自動四段)　(一)出來上る。●成就する。●成功する。●落成する。(二)貴人の來るを云ふ。○「成らせらる」

なる

鳴(自動四段)　音を發する。

なる

慣(自動下二段)　癖になる。●習慣となる。●仕來りとなる。

なる

狎(自動下二段)　親しみの餘り禮を亂す。●心安だてをする。

なる

馴(自動下二段)　なつく。●親しむ。●なじむ。

なるほど

成程(副)　如何にも。●實にも。●誠に。

なるべく

可成(副)　出來るだけ。●力の限り。●都合のよき限り。

なるかみ

鳴神(名)　雷。

なるかみづき

鳴神月(名)　陰暦六月の異名。

なるかみの

鳴神の(枕)　雷は目に見えずして響のみ聞かるゝものゆゑ音のみ聞くの枕詞。(萬葉)

なるたけ

成丈(副)　なるべくに同じ。

なるこ

鳴子(名)　小鳥を逐ふ爲に田畠に設け置くもの。板に竹の管を附け繩にて引き鳴らすやうに作る。

なるこだ

鳴子田(名)　鳴子を設けたる田。(謠曲)

なるさを

鳴竿(名)　鳴子を掛け置く竿。

なるせ

鳴瀬(名)　水音の高き瀬。

なるせろ

(名)　鳴瀬に同じ。ろは助辭。(萬葉東歌)

なほ

猶。尙(副)　やはり。●まだ。●とかくに。●どうしても。●もそっと。●いよ〳〵。

なをり

名折(名)　名譽を失ふ事。●評判の惡しくなる事。○長門本平家「大將軍とこそ見まゐらせ候へ。きたなしや源氏の名をりに返し合はせ給へ」

なをり

波折(名)　波の折れ返りて寄せ來る處。(記)

なほりもの

(名)　齋宮の忌詞。死をいふ。

なほる

直(自動四段)　(一)直くなる。●正しくなる。(二)もとの如くになる。(三)齋宮の忌詞。死ぬるをいふ。

なをれ

名折(名)　なをりに同じ。

なほ〳〵

尙尙(副)　(一)いよ〳〵。●ます〳〵。○謠曲「なほ〳〵廻る盃の」(二)手紙の本文終りて後更に書き加ふる時に置く詞。●追啓。●二白。

なほ〳〵に

(副)　すなほに。●おだやかに。○萬葉「なほ〳〵に家に歸りて業をしまさね」

なほなほがき 尚尚書(名) 手紙の本文終りて書き加へたる尚々以下の文をいふ。

なほなほし (形。形狀言シク活) 通例なる。●平凡なる。●下品なる。●何でもない。○源氏「なほ〳〵しき唯人のなからひにてだに」

なほらひ 直會(名) 神の祭終りて後行ふ宴會。◎直りあひの約音にて潔齋をゆるめ平常に復るの意。○續紀宣命「大嘗のなほらひの豐の明り」

なおや 名親(名) 名附親。

なほあらじに (副) 默しては止まじとて。●此儘にては置かじとて。○源氏「なほあらじに弘徽殿の細殿に立ちより給へれば」

なほざり 等閑(名) 物事を重んぜぬ事。●かりそめ。●なげやり。△(形)—等閑なる。(副)—等閑に。

なほみ (名) 直日に同じ。

なほし 直衣(名) 公卿裝束の名。製法は袍に同じくして地と紋と違へり。三位以上の着用する私服の一つにて烏帽子指貫の時之を用ふ。

なほし (形。形狀言ク活) 正し。●眞直なる。

しは助辭。なほに同じ。○續紀宣命「猶し法を興し隆えしむるには」謠曲「天仙尚し死苦の身なり」

なほしのくらゐ 直衣位(名) 直衣を着るべき資格の位。すなはち三位以上。

なほしもの 直物(名) 除目の後又吟味ありて官位任命のある事。○狹衣「長月朔日頃直し物のあるに中將の君中納言になり給ひにけり」

なほしすがた 直衣姿(名) 直衣に烏帽子指貫を着用せる出で立ち。

なほび 直日(名) 神の名。世の中の凶事をすべて吉事に直す事を守る神。

なほびと 直人(名) たゞ人に同じ。●門閥家ならぬ人。(雅)

なほす 直(他動四段) (一)直き樣にする。●正しから

しむる。●矯正する。〔二〕もとの如くにする。●繕ふ。

なは 縄(名) 〔一〕藁又は麻など綯ひて作りたる紐。〔二〕釣する人の海に繰り入るゝ糸。〔三〕罪人を縛る紐。

なはむしろ 縄莚(名) 縄にて作れる敷物。(枕)

なはやかに (副) 聳えたる有樣。(字鏡)

なはやけし (形。形狀言ク活) 聳えたる有樣。(字鏡)

なはえい 縄纓(名) 縄の如く筋細き纓。(續世繼)

なはて 縄手(名) 縄に同じ。

なはて 縄手。畷(名) 田地の間にある道。

なはめ 縄目(名) 縄にて縛らるゝ事。●縲紲。

なはしろ 苗代(名) 〔一〕粟を蒔きて生び出でしめたる稻の苗。……早苗の料に用ふるもの。〔二〕又之を生び出でしめたる田。●苗代田。

なはしろいちご 苗代覆盆子(名) 草の名。苗代の生長する頃に熟する覆盆子。●田植いちご。

なはしろがき 苗代垣(名) 苗代田に立てめぐらしたる垣。

なはしろだ 苗代田(名) 苗代を生び立たしむる田。

なはしろぐみ 苗代茱萸(名) 木の名。苗代の生長する頃熟するぐみ。

なはしろみづ 苗代水(名) 苗代田に堰き入るゝ水。○新古今「雨ふれば小田のますらを暇あれや苗代水を空にまかせて」

なはせみ 蚌蟬(名) 蟬の一種。(和名抄)

なはすだれ 縄簾(名) 縄を垂らして簾に代用する事。農家又は賤しき商家(居酒屋、米屋など)に設けたるもの。

なか 中(名) 〔一〕まんなか。●中央。〔二〕物と物との間。●中間。〔三〕内。●内部。〔四〕人と人との關係。(ながみしも)●交情。

なが 長(名) 長上下の略。

なかね 仲居(名) 下婢。

ながね 長居(名) 長座。●長尻。

ながい 長寢(名) 長き時の間寢る事。●ながれ。

ながいり 中入 〔一〕軍陣にて暫時の休戰。〔二〕能樂にて前段の演者が暫時樂屋に引っ込む事。〔三〕芝居にて幕の間を長くして演者の暫時休息する事。

ながいき 長生(名) 長く生きて居る事。●長壽。

ながいも 長薯蕷(名) 山の芋の一名。

なかば 半(名) 半分。●二分の一。●中途。●半途。●最中。

なかば 半(副) 半分ぐらゐ。

ながばかま 長袴(名) 袴の一種。足の丈よりも長く跡に引くやうに作れるもの。素袍の時用ふる袴の類。

なかばのつき 半月(名) 琵琶の異名。◎その面に半月狀の孔ある故に云ふ。(玉葉)

ながはし 長橋(名) 長き橋。○「瀨田の長橋」

ながはし 長階(名) 〔一〕長ききざはし。〔二〕古へ禁中にては清涼殿より紫宸殿へ通ふ廊にありたる階。

ながばしら 中柱(名) 壁、戸などに付かずして室の中間に顯はれたる柱。中古にては母屋と廂の間にあるものを云ふ事多し。

ながはしのつぼね 長橋の局(名) 女官の名。勾當內侍の異名。

ながはず 長弭(名) 普通のよりも長く作りたる弓の弭。(萬葉)

なかに 中に(副) 其中より撰び分けて。●中にて特別に。

なかには 中庭(名) 蓮物の間にある小庭。●坪庭。

なかとりづくゑ 中取案(名) 神前に供物など奉る机。

ながたうぐ 長道具(名) 武器の名。鎗長刀の類。

なかとみ 中臣(名) 氏の一つ。古へは朝廷の神事に奉仕し祝詞を讀み又祓する事を掌る職。

なかぢ 仲子(名) 三人兄弟の有る眞中の子。(紀)

ながち 長血(名) 病の名。長く血の下るもの。

ながる 流(自動下二段) 〔一〕水の低き方に行く。〔二〕流るゝ如くに移り行く。●いつとなく世に弘まる。●やめになる。●中止になる。〔三〕固體の物が流動體となる。

ながるるかすみ 流霞(名) 酒の異名。

なかを 中緒(名) なかのをに同じ。

ながわきざし 長脇差(名) 德川時代博徒の異名。

なかがき 中垣(名) 中じきりの垣。……隣境などのを云ふ。

なかがみ 中神(名) かたゝがへを見よ。○源氏「今宵中神內よりぼふたがりて侍りけり」

ながかみ 長神(名) ながかみに同じ。……かたゝがへを見よ。

ながかみしも 長上下(名) 武家の禮服の名。上下(かみしも)の下

が足より長くひきたるもの。

なかやョウ 中樣(名) 紙の一種。薄樣と厚樣との間なるもの。

なかだち 中立(名) 媒妁。●媒介。

ながだち 長太刀(名) 武器の名。長刀に似て刃特に長きもの。

ながたらし (形。形狀言シク活) 餘り長くある。●長くて退屈する有樣。

なかれ 勿(助動) 禁止の詞。無くあれ。●な。○「見る勿れ」「爲す勿れ」

ながれ 流(名) 〔一〕流るゝ事。●流るゝ處。〔二〕旗を數ふる詞。○「白旗一ながれ」〔三〕末流。●血統。●子孫。〔四〕流儀。●流派。

ながれくゎんぢやチョウ 流灌頂(名) 水難死亡者などの爲め水中に卒都婆など立てゝ施行する供養。用施餓鬼の類。

ながれや 流矢(名) 何れよりとも知らず飛び來る矢。

ながれあし 流葦(名) 流れ漂ふ葦。○千載「滿汐の末葉を洗ふ流葦の君を思ふ浮きみ沈みゝ」

ながれぎ 流木(名) 河又は海に流れ漂ふ材木。

ながれす 流洲(名) 流れ漂ひたる水草の根などより成りたる洲。

なかぞら 中空(名) 〔一〕空の眞中。〔二〕中途。〔三〕どちつかずの處。

ながさうじ 長精進(名) 數日間行ふ物忌のための精進。(蜻蛉)

ながそで 長袖(名) 〔一〕衣冠、法衣、道服等すべて普通の衣服に比べて長き袖の衣類。〔二〕長袖を着る職業の人。すなはち公卿、僧侶、醫師の類。

なかつぼね 長局(名) 長く續けて建てたる局。女官又奥女中の局を云ふ。

ながづかへ 長仕(名) 常に在京して朝廷に奉仕する官人の稱。

なかつかさ 中務(名) 中務省の略。

なかつかさしやショウ 中務省(名) 古代の制。八省中の重職にして宮中の事を統領する役所。官吏には卿、大輔、少輔、大少亟、大少錄、侍從、內舍人、內記、監物等ありて太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮、中宮の四職及び大舍人、圖書、內藏、縫殿、陰陽、內匠の六寮之に屬す。●なかのまつりごとのつかさ。

なかつかみ

（名）　獣の名。豹の古名。

ながづき

長月（名）　九月の古名。◎夜長月の意とも。稲刈月（いなかりづき）の略とも云ひて定説なし。

なかなほり

中直（名）　不和になりたる中の舊に復する事。●和睦。

なかなか

中中（副）　〔一〕却りて。●なまなか。●なまじっか。●けっく。○源氏「いさいたう面痩せ給へれど中々いみじうなまめかしうて」（又）―中々に。△（形）―中々の。（又）―中々なる。（雅）〔二〕足利時代の詞にては左樣尤もいかにもの意。……人の口上に答へて云ふ。△（形）―なか〳〵の。○謠曲「何と御舟より下りよと仰せ候ふか。なか〳〵の事急いで下り候へ」（又）―なか〳〵なる。〔三〕決して。●容易に。○「なか〳〵お宿は參らせがたし」〔四〕餘程。●大そう。●すこぶる。○「なか〳〵面白し」（又）―なかなかに。

ながなが

長長（副）　長く。●長く久しく。○「長々在京仕候」。（又）―長々と。△（形）―長々の。○「長々の煩らひ」

ながながし

（形。形狀言シク活）　長し。●長く久し。○新古今「我心春の山邊にあくがれて長々し日をけふも暮らしつ」

長鳴鳥（名）　鷄の異名。

ながなきどり

（名）（雅）　ながばに同じ。（雅）

ながら

（後）　〔一〕同時に彼と此と二つの動作等の意を示す。●つゝ。○「月を見ながら歌よむ」〔二〕共に。●一つに。●殘らず。●儘に。○古今「萩の露玉にぬかんと取れば消ぬよし見ん人は枝ながら見よ」源氏「大臣も御子ども六人ながら引きつれておはしたり」〔三〕なれども。●とはいへども。○源氏「心ながらも胸いたく」「失禮ながら御傳言奉願候」……△（形）―ながらの。

ながらひ

（名）　人と人との關係。●交情。●間がら。

ながらふ

（自動下二段）　世に長く生きて居る。●生き殘る。●生存する。

ながらふ

（自動下二段）　流るに同じ。●雨などの降る。（萬葉）

ながむ

長（他動下二段）　長くする。

ながむ

詠（他動下二段）　〔一〕聲を長くして歌ふ。●詠

歌する。●吟ずる。○著聞「法勝寺の塔の上に夜ながめける歌」〔二〕長く見やる。●見渡す。●眺望する。

ながむ 詠（自動下二段） 物思のある時は何となく草木のさま空の色などのながめらるゝものなれば其意にて用ふ。●物思する。○今昔「世の中すさましくおぼえて家につくづくとながめ居たるなりけり」

なかむかし 中昔（名） 桓武天皇より後鳥羽天皇頃までを云ふ。●中世。●中古。●平安時代。

なかんづく 就中（副） 中に就きて。●其中にも。●特に。●取分け。

ながむしろ 長莚（名） 蕅通の莚より長く作れる莚。一間以上のもの。（字治）

ながうた 長歌（名） 短歌より句數多くして五七の調に組み立てたる和歌。但し結末は五七七と爲すを法とす。

ながうた 長唄（名） 俗曲の一種。德川の中世粹屋勘五郎の初めたるもの。

なかのはる 仲春（名） 陰曆の二月。（躬恒集）

なかのを 中緒（名） 箏の第六絃より第十絃までの糸。

なかのおほともひ 中辨（名） 太政官の官名。ちゅうべんに同じ。……辨を見よ。（和名抄）

なかのおよび 仲夏（名） 陰曆の五月。（躬恒集）

なかのなつ 中指（名） 中指に同じ。（和名抄）

なかのまつりごとのつかさ 中務省（名） なかつかさしょうに同じ。（和名抄）

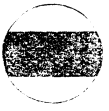
なかのふゆ 仲冬（名） 陰曆十一月。（好忠集）

なかのあき 仲秋（名） 陰曆八月。（躬恒集）

なかのみやのつかさ 中宮職（名） ちゅうぐうしきに同じ。（和名抄）

なかのものまうすつかさ 中納言（名） 中納言に同じ。（和名抄）

なかぐろ 中黑（名） 〔一〕矢の羽の先と本と白くして眞中の黑きもの。〔二〕紋の名。丸の中に一を引きたるもの。新田氏の紋ゆゑ新田中黑とも云ふ。〔圖〕



なかぐち 中口（名） 中言に同じ。

ながぐつ 長靴（名） 靴の一種。膝の下まで這入るやうに作りて雨中に用ふるもの。

なかぐみ 中汲（名） 濁り酒の程よき所を汲みたるも

ながくみわ
ながや

の。●諸味。

長組輪(名)　ながこゆびに同じ。

長屋(名)　〔一〕横を續けて長く建て連れたる家。〔二〕一棟を幾軒にも仕切りて門の左右に建て續けたる家。

なかやど

中宿(名)　小休みをする爲めの場所。●途中の休息所。

なかやどり
ながやか

中宿(名)　なかやどに同じ。

長き有樣。△(形ク)長やかなる。(副)長やかに。

なかやしき

中屋敷(名)　大名の邸宅に云ふ。上屋敷と下屋敷との間のもの。

なかま

仲間(名)　同輩者。●同志者。●運中。●同業組合。

ながまき

長卷(名)　武器の名。長刀に似て又三尺柄四尺ばかりあるもの。其柄は白布にて卷き詰む。

ながけし
ながぶえ
ながぶえ
ながご

(形。形狀言ク活)　長しに同じ。

中笛(名)　中位の長さの笛。(和名抄)

長笛(名)　横笛の最長きもの。(和名抄)

中子(名)　〔一〕物の中に入れらるゝもの。●心。●實。〔二〕刀の身の柄に嵌め込む部分。●こみ。〔三〕伊勢齋宮の忌詞。佛。

なかごろ

中頃(名)　〔一〕中程。●半途。〔二〕中古。●中世。

なかごと

中言(名)　人と人との交情を離間せしむるやうに言ひ立つる中間の人の言語。●中口。(萬葉)

ながごと
ながこゆひ

長言(名)　長話。

長小結(名)　侍烏帽子の一種。小結の端を長く出だして少年のかぶるもの。〔圖〕

ながえ

長柄(名)　〔一〕すべて柄の長きもの。〔二〕長柄の傘の略。〔三〕長柄の鎗の異。〔四〕長柄の銚子の略。

ながえ

轅(名)　牛車にて牛を入れて挽かするため長く前に出だし作れる柄の如きもの。現今の人力車の舵棒に似たり。

長烏帽子(名)　立烏帽子の一種。普通のよりも形の長きもの。(枕)

ながえのてうし（ナマ） 長柄銚子（名） 横に長く柄を作りたる銚子。婚禮の盃などに用ふるもの。

ながえのかさ 長柄傘（名） 傘の一種。昔し公卿大名の行列に槍の如く立てゝ持たせたるもの。

ながえのやり 長柄鎗（名） 特に柄を長く作りたる鎗。

なかて 中手（名） 稻の一種。早稻より後、晩稻より前に熟するもの。

ながて 長手（名） 長き路。●遠き路。

ながあはび 長鮑（名） 熨斗鮑（のしあはび）に同じ。

ながあめ 長雨（名） 毎日降り續く雨。

なかさだ （名） 中位。●中等。●中央。●まんなか。（源氏）

なかざし 中差（名） 〔一〕服に矢を差すには上に雁朕（どがりそ）を差し次に尖矢（とがりや）を差すを法とす。故に雁朕を上差といひ尖矢を中差といふ。〔二〕婦人の髮飾の具。笄の一種。

なかゆひ 中結（名） 裝束の上に締むる帶。

なかゆび 中指（名） 手足の最も長き中央の指。●中高指。●なかおよび。

ながめ 詠（名） すべて詠むる事。●詠吟。●眺望。●物思。

ながめ （名） 長雨の約音。◎霖雨。

なかみち 中道（名） 物に挾まれたる間の道。●中央の道。○「田の中道」「花の中道」

ながし 流（名） 物を流す事。●物を流す處。

ながし 長（形。形狀言ク活） 短からぬ。●久し。●遠し。

なかじろ 中白（名） 矢羽の名。末と本と黑くして眞中の白きもの。

ながしきょうじ 長精進（名） ながさうじに同じ。（蜻蛉）

なかじま 中嶋（名） 河、湖、池などの中にある嶋。

なかびと 中人（名） なかうど。●ちゅうにん。●媒妁人。

ながびと 長人（名） 壽命の長き人。（記）

ながびつ 長櫃（名） 櫃の一種。今の長持に似て脚あるもの。

ながびく 長引（自動四段） 長くなる。●延引する。●期に後るゝ。

ながひこ 長彦（名） 稻の異名。○清輔集「鶴の住む澤邊にかへす苗代は世を長彦の種や蒔くらん」

ながもち 長持（名） 衣類など入るゝ一種の櫃。脚なく

ながす

細長くして運搬に便なるもの。

流(他動四段)　〔一〕流れしむゝ。〔二〕流罪に處する。●左遷する。

ながすびつ

(名)　長圍爐裏。(枕)

なよよか

なよやかに同じ。△(形)—なよゝかなる。

なよたけ

(副)—なよゝかに。

弱竹(名)　柔かくして風などに靡き易き竹。(雅)

なよたけの

弱竹の(枕)　とをよるの枕詞。とをよるは撓み寄るの意なればなよ〳〵したるなよ竹の如くと言ひ掛けたるなり。(萬葉)

なよなよと

(副)　柔らかに。●しなやかに。●ぐにゃ〳〵と。

なよらか

なよやかに同じ。(形)—なよらかなる。

なよや

(副)—なよらかに。

なよやか

(感)　歌謠の拍子に添ふる詞。(催馬樂)

柔らか。●しなやか。(形)—なよやかなる。

なよぶ

(副)—なよやかに。

(自動上二段)　しなやかである。●柔らかくある。●ぐにゃ〳〵して居る。○源氏「なよびたる御衣」同「御心なよびたる方に過ぎて」

なよめかし

(形。形狀言シク活)　なよびたる有樣。●しなやかなる有樣。(空穗)

なよし

鰡(名)　魚の名。いなの一名。

なよびか

なよやかに同じ。(形)—なよびかなる。

なよせ

(副)—なよびかに。

名寄(名)　物の名稱、題目などを集め記せるもの。

なた

鉈(名)　及物の名。及厚く幅廣くして枝を切り木を割るなどに用ふるもの。

なだ

灘・泽(名)　波高き海。●荒海。●大海。●波音の常に聞ゆる海邊。

なだい

名代(名)　名の高き事。●有名。●著名。△(形)—名代の。

なだいめん

名對面(名)　禁中にて亥の一刻(今の夜十時頃)に宿直の侍臣おの〳〵その名を問はれて名のる式。○源氏「なだいめんは過ぎぬらん」

なだる

(自動下二段)　斜になる。●土雪など落ち崩るゝ。

なたかし

名高(形。形狀言ク活)　有名なる。●著名な

る。

なだたる　名立(形)　名に立ちてある。●有名なる。○源氏「名立たる春の御前の花園」

なだたし　名立(形。形狀言シク活)　名に立つらしい。●評判になりそうな。(源氏)

なだれ　(名)　なだるゝ事。●山などに降り積みたる雪の崩れ落つる事。又は其崩れ落つる雪。

なたね　菜種(名)　(一)油を作る材料となる油菜の實。(二)菜の花。

なだらか　おだやか。●ゆるやか。●やはらか。●柔和。●穩順。△(形)―なだらかなる。(副)―なだらかに。……(雅)

なだらむ　(他動下二段)　なだらかにする。(源氏)

なだむ　宥(他動下二段)　ゆるす。●ゆるめる。

なたまめ　鉈豆(名)　豆の一種。其莢の鉈に似たる形したるもの。

なだて　名立(名)　無實の名を立つる事。●名折れ。●名譽損害。○後拾遺「散るまでは旅寢をせなん木のもとに歸らば花の名立なるべし」

なれ　慣。馴(名)　慣るゝ事。●習慣。

なれ　汝(代)　ななんちに同じ。●あなた。●そなた。●おまへ。○月詣集「なれが汲む板井の水の雫にも劣らぬものを戀ふる涙は」

なれなれし　馴々し(形。形狀言シク活)　いかにも親しき有樣。

なれごろも　馴衣(名)　身に着慣れたる衣。(雅)

なれこまひぃ　(名)　昔し旅人の神社佛閣などの前を通り過ぐる時その手向にて同行者の中より必ず一人撰ばれて舞を舞ふの習慣あり。之を云ふ。○盛衰「康賴王子々々の御前にてなれこまひをば仕らる。

なぞ　謎(名)　(一)或る意味を他の言葉の中に隱し入れて判ぜしむる一種の遊戯。……「破れた蚊屋とかけて婚禮の鳴臺と解く。心は釣る(鶴)と蚊め(亀)がはいる」の類。(二)すべて意味をあらはにせず下に隱して判ぜしむるやうに作りたる歌、文、文字、畫の類。

なぞ　(副)　疑問副詞。など。●いかで。

なぞ　(句)　疑問の句。何故ぞ。●何ぞ。

なそり　納蘇利(名)　雅樂の曲名。●なっそりなふそりなすりなどゝも稱ふ。

なぞなぞ　謎々(名)　なぞの本語。◎何ぞ〳〵と問はし

むる故の名。

なぞらふ　準（自動四段）　其物事に比する。●準ずる。●擬する。●なぞふる。●なずらふる。

なぞらふ　準（他動下二段）　なずらはしむる。

なぞふ　（他動下二段）　なずらふに同じ。

なぞの　（形）　何の。●如何なる。○謠曲「あれになぞの翁ども」

なつ　夏（名）　四季の一つにて春と秋との間。陰暦にては四五六の三ヶ月。陽暦にてはおよそ五六七の三ヶ月。

なつ　撫（他動下二段）　〔一〕手先にて輕く擦る。〔二〕下民を憐み恤む。

なつばらひ　夏祓（名）　なつばらへに同じ。

なつばらへ　夏祓（名）　六月晦日に行ふ祓。●みなづきばらへ。●なごしのばらへ。

なっとう　納豆（名）　食品の名。大豆を煮て醸したるもの。

なっとうゑぼし　納豆烏帽子（名）　侍烏帽子の一名。

なっとく　納得（名）　得心。●承知。△（動）―納得す。

なつかぐら　夏神樂（名）・　神樂は禁中にて冬季行はるゝを常とす。故に夏季に行はるゝを特に夏神樂と稱ふ。（夫木）

なつかげ　夏蔭（名）　夏の頃木の葉の繁りたる蔭。

なつかし　懷（形。形狀言シタ活）　懷くべき有樣。●其物に接して長く馴れ親しみて居たき感情の優る有樣。●慕はし。●睦まし。

なつかしぐさ　（名）　撫子の異名。

なつそ　夏麻（名）　夏の頃糸に引き取るべき麻。

なっそり　納蘇利（名）　なそりに同じ。雅樂の曲名。

なつそびく　夏麻引（枕）　うなひうなかみなどの枕詞。○萬葉「なつそびく海上潟の沖つ洲に舟はてゝめんさよふけにけり」同「なつそびくうなひ（地名）をさして」

なつな　薺（名）　草の名。春の七草の一。異名はべんべんぐさ。

なつむ　泥（自動四段）　滯る。●ぐずゝする。●物泥する。

なつむし　夏虫（名）　〔一〕夏出づる虫類の總名。〔二〕虫の名。螢。●火取虫。〔三〕虫の名。螢。

なつく　懷（自動四段）　馴れ附くの意。◎馴々しくなる。●なじむ。●親しむ。

なつく　懷（他動下二段）　懷かしむる。

なつく 名(他動下二段) 名を附くる。●呼ぶ。●稱ふる。●號する。

なつくさ 夏草(名) 夏になりて生ひ茂るすべての草。

なつくさの 夏草の(枕) 〔一〕ぬ(野)にかゝる枕詞。草の生ひたる野の意。○萬葉「夏草のぬじまの崎」〔二〕思ひしなえての枕詞。夏草の如く萎ゆるの意。(萬葉)

なつやせ 夏瘦(名) 暑氣の爲に疲勞して身の瘦する病。

なつまつり 夏祭(名) 夏季に行ふ神社の祭。

なつご 夏蠶(名) 蠶の一種。夏孵化するもの。

なつごろも 夏衣(名) 夏着る衣。單衣帷子の類。

なつこだち 夏木立(名) 夏の繁りたる木立。

なつさゝふ (自動四段) 〔一〕水にひたる。●水につかる。●浮ぶ。●漂ふ。○萬葉「山の端に月傾けば漁する海士の燈火沖になつさふ」〔二〕馴れ親しむ。●附き添ひて離れぬ。○源氏「幼きよりなづさひしものゝ」

なつき 名簿(名) 入門又は降參等の證として呈する姓名を記したる紙。●みゃうぶ。●めいぶ。

なつぎく 夏菊(名) 草の名。夏花咲く菊の一種。

なつめ 棗(名) 〔一〕木の名。夏に至りて茅を出だし秋の初に實を結ぶ。其形卵形にして食ふべく又藥とすべし。〔二〕抹茶を入るゝ器の名。棗の實の如き形したるもの。

なつみ 菜摘(名) 菜を摘む事。

なつしよ 納所(名) 〔一〕寺にて賄をする處。〔二〕納所の事務を扱ふ僧。

なつびき 夏引(名) 〔一〕夏季に引きたる麻糸。〔二〕催馬樂の曲名。

なな 七(數) しち。●なゝつ。

なないろぐゝし 七色菓子(名) 七色に彩色し分けたる七種の菓子。庚申祭の供物にするもの。

ななり (句) なるなりの略。○源氏「しか物したるなゝり」

ななりそ 莫鳴菜(名) なのりそに同じ。

ななよづき 七夜月(名) 七月の異名。◎七夕のある月の意。

ななそ 七十(數) しちじふ。

ななそぢ 七十(名) しちじふ。

ななつ 七(名) 昔の時刻の名。今の午前午後の四時にあたる。

ななつ 七(數) 四に三を加へたる數。●しち。

ななつのほし 七星(名) 北斗七星。○夫木「逢ひに逢ひて日よしの空のどかなる七つの星の照す光に」

ななつのみち 七道(名) 東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の諸道○夫木「ゆたかなる七つの道の貢物海山かけて定めおきてき」

ななつごのさや (名) 魚子形の綃。(六帖)

ななぬか 七七日(名) 人死して後四十九日目に當る日、佛葬祭にては此日法事を行ふなり○伊勢「七七日のみわざ安祥寺にてしけり」

ななのうるき (名) 七重寶樹に同じ。

ななのやしろ 七社(名) 近江の國にある日吉の七社。

ななくさ 七草(名) 正月七日に摘み及び食して祝ふ七種の若草。すなはち芹、薺、五形、はこべら、佛の座、鈴菜、鈴しろ、の七つ。(二)五節句の一つ。七草を摘みて祝ふ正月七日。(三)秋の野に賞翫せらるゝ七種の草花。すなはち萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、朝顔の七つ。

ななさすほし 七在星(名) 北斗七星。○夫木「我戀は七ます星に祈りのみ人の思ひを空に知るなり」

七在神(名) 近江の國にある日吉の七社。○續後拾遺「あはれさはなゝます神も思ひ見よ九品にもかくる心を」

ななこ 斜子。魚子(名) (一)絹布の一種。織目の斜に打ち違ひたるやうになりたるもの。(二)魚の卵の如く小さき圓形を一面に打ち並べたる金屬の細工。

ななめ 斜(名) 筋違。●ほすなり。●ゆがみなり。●まがりなり。△(形)—なゝめなる。(副)—なゝめに。

ななめならず (副) 一通ならず。●通例ならず。●餘程。●充分に。

ななし 無名(名) (一)名の無き事。●無名。(二)上東門院御物琵琶の名。

ななしおよび 無名指(名) 藥指。●なゝしのゆび(和名抄)

ななせ 七瀨(名) (一)祓をする時に云ふ詞。京都の河合、一條、土御門、近衛、中御門、大炊御門、二條、七箇所の川瀨○「七瀨の御祓」(二)多

くの川瀬。○萬葉「松浦川七瀬の淀はよどむとも」同「飛鳥川七瀬の淀に吹く風の」

なら 檜(名) 木の名。柏の類にて秋の末紅葉するもの。

ならひ (名) ならはしに同じ。習慣。●風習。

ならにんぎょう 奈良人形(名) 大和奈良名産の人形。白木彫に彩色したるもの。

ならはふし 奈良法師(名) 昔し奈良の興福寺東大寺などに居たる僧兵。

ならはかす (他動四段) 習はすに同じ。

ならはし (名) 仕來り。●習慣。●風習。

ならはす (他動四段) 習ひ學ばしむる。●馴れしむる。●習慣とする。

ならがみ 奈良紙(名) 吉野紙の如く薄き紙。○職人盡歌合「忘らるゝ我身よいかに奈良紙の薄きちぎりは結ばざりしを」

ならづけ 奈良漬(名) 酒の糟に漬けたる香の物。◎もと奈良の名産なりし故の名。

ならふ 習(他動四段) 學ぶ。●復習する。

ならふ 傚(自動四段) 眞似る。

ならく 奈落。那落(他) 地獄に同じ。(佛教)

ならぶ 並(他動下二段) 並ばしむる。

ならぶ 並(自動四段) 列をなして揃ふ。●並列する。●列する。

ならし (名) 平均。

ならび 並(名) 並ぶ事。●列。

ならびに 並に(接) 別々の詞または章句を一つに結びつくる詞。●および。

ならす (他動四段) 不同のなき樣にするをいふ。●平均にする。●平等にする。

ならす 馴(他動四段) 馴れさする。

ならす 鳴(他動四段) 鳴らしむる。●音を立てしむる。

ならずもの (名) 無職業の不良民。●無賴の徒。

なん 難(名) (一)わざはひ。●災難。(二)困難。●難儀。(三)缺點。●非難。

なん 何(代) なにの音便。○「なんの事だ」

なん 何(形) 疑問形容詞。なにの音便。○「なん錢なん厘」

なむ 嘗(他動下二段) 舌の先にて味はふ。●ねぶる。

なむ 並(自動四段) 並びに同じ。

なむ 並(他動下二段) 並ばしむる。●並べる。

なむ 南無(感) 梵語。譯して歸命と云ふ。◎佛を拜む時最初に唱ふる詞。轉じては神を拜むにも

用ふ。○「南無阿彌陀佛」「南無釋迦如來」「南無八幡大菩薩」「南無金毘羅大權現」

なん（後）　そに似て少し緩やかなる詞。○古今序「補本人麿なん歌の聖なりける」源氏「光る君といふ名は高麗人の愛でゝつけゝるとなん」

なん（助動）　〔一〕未來を掛けて云ふ詞。んに似て少し緩やかなり。これは連用言より受くる格とす。○古今「いざ櫻われも散りなん一盛ありなば人にうきめ見えなん」〔二〕他をして左樣に有らせたしと願ふ詞。これは將然言より受くる格とす。○源氏「權光とくまゐらなんと思ず」伊勢「はや夜も明けなんと思ひつゝゐたりけり」

なんばん　南蠻（名）　〔一〕南方の夷狄。〔二〕德川時代に波來交通せし西班牙葡萄牙等の國名。故に當時は西洋、外國、舶來などいふ意に南蠻の文字を用ひたり。

なんばのうみ　難波海（名）　催馬樂の曲名。

なんぼ（副）　何程。●如何程。●いくら。

なんぼう（副）　何と。●どんなに。○謠曲「なんぼうあさましき世を捨者の所存候ふぞ」

なんど　南都（名）　大和の國奈良の異名。……北方なる京都に對して。

なんど　納戸（名）　衣服化粧道具など納め置く室。

なんど（助名）　などに同じ。○「面白なんど言ふばかりなし」

なんぢ　汝（代）　なむぢに同じ。

なむぢ　汝（代）　相對する人を指して呼ぶ詞。古は目上の人にも目下の人にも言へり。●あなた。●おまへ。

なんてう　南朝（名）　延元元年大和の吉野に建てられたる後醍醐天皇の朝廷。……此時京都にては足利尊氏私に光明天皇を位に即け奉りて朝廷二つに分れたり。之を北朝と稱す。爾來五十七年を經て兩朝統一に歸せり。

なんでふ（形）　何と言ふ。●いかなる。●何の。○竹取「なんでふ心地すれば斯く物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ」

なんでふ（副）　何と言うて。●いかにして。●何とて。○竹取「なんでふさる事か侍らん」

なんりう　南呂（名）　八月の異名。

なんれうう　南鐐（名）　〔一〕銀の異名。〔二〕德川時代貨

なんたい
男體(名)　男の姿。○謠曲「花の光にかゝやきて男體の人の見え給ふは」

なんだい
難題(名)　〔一〕詩歌の困難なる題。〔二〕轉じて總べて困難なる問題および條件。

なんぞ
(副)　なにぞに同じ。何として。●いかで。

なんなんとす
垂(句)　なりなんとすの音便。◎殆んど到り及ばんとす。○「三年になん〳〵とす」

なんぷう
難風(名)　海上の惡風。

なんこつ
軟骨(名)　軟かくして彈力を有する一種の骨。

なんてい
南庭(名)　古へ禁中にて南殿の庭。

なんてい
南挺(名)　南鐵を挺にしたるの意。◎竿にしたる銀。

なんてん
南天(名)　灌木の名。葉は對生にして赤き粒々の實を結ぶもの。

なんでん
南殿(名)　紫宸殿の一名。

なんてんしゅく
南天蜀(名)　灌木の名。南天に同じ。

なむさん
(名)　南無三寶の略。

なんざん
難産(名)　産の重き事。

なむさんぼう
南無三寶(感)　失敗して自ら驚く時に言ふ詞。●忽に醒め忽に悟る時に言ふ詞。○謠曲「つら〳〵人間の有樣を案ずるに。百年の歡樂も命終れば夢ぞかし。云々。五十年の歡樂も王位になれば是までなり。げに何事も一睡の夢南無三寶々々々々。よく〳〵思へば知識は此枕なり」

なんぎ
難儀(名)　艱難辛苦。●困難。●難澁。

なんぎ
難義(名)　解釋に骨の折るゝ意味。●むつかしき意味。

なんぎゃうぎょう
難行(名)　僧のする艱難なる修行。

なんきく
南極(名)　地球の南の極端。

なんめり
(句)　なるめりの音便。

なんじょ
難所(名)　困難なる場所。

なんしゅく
男色(名)　男同士の姦通する事。●雞姦。

なんじゅふ
難澁(名)　困難。●難儀。

なんびゃうぎょう
難病(名)　治癒し難き病。

なんせん
難船(名)　船中にて風波の災難に遭ふ事。●破船。△(動)―難船す。

なんぜんぶしゅう
南贍部州(名)　佛教にて云ふ須彌山の南部の國。すなはち我々人類の住む現在世界。

なんす
なんすれぞ
なう

難（他動サ變）　非難する。●缺點を指示する。
何爲（副）　何として。●いかでか。
ノウと發音する詞はのの部にあり。

な ふ（レ レ）
なっふ（ソ ソ）

綯（他動四段）　縄に造る。
裝（自動下二段）　なゆに同じ。

なのり

名乘（名）　〔一〕名乘る事。〔二〕實名。……武家時代には本名の外に藤吉郎、平太郎の如き通稱を用ひし故これに對して秀吉、忠勝の如き本名を呼ぶ稱。

なのりそ

神馬藻。莫告藻（名）　海草の名。黑色にして亂髪の如く波の上に浮び居るもの。穗俵の種類。◎其名の附きたる故事は。日本紀允恭天皇の卷に曰く「十一年衣通姫歌曰。ここしへに君も過へやもいさなとり海の濱藻のよる〻時々を。時天皇謂二衣通姫一曰。是歌不可聆二他人一。皇后聞必太恨。故時人號二濱藻一謂二奈能利曾毛一」とあり。即ち莫告藻（告ぐる莫れ）の意にて呼ばれしなり。又神馬藻の文字を用ひしは。和名抄に神馬莫（なのりそ）騎（なのりそ）之義なりと見ゆ。

なのりそも

（名）　なのりそを見よ。

なのる

名乘（自動四段）　〔一〕我名を唱ふる。〔二〕時鳥の鳴く。◎時鳥は我名を呼びてホトトギス〳〵と鳴くといふよりの言ふ詞。（雅）

なのおに

儺鬼（名）　追儺の時放逐せらるべき惡魔。○躬恒集「十二月のつごもりの夜なのおにを」

なのか
なのめ

七日（名）　なぬかに同じ。
なゝめ。●大概。●通例。●ゆがみなり。
△（形）―なのめなる。（副）―なのめに。……轉じて斜ならずの意。●謠曲「帝なのめに思召され」（雅）

なく

泣（自動四段）　悲しさ嬉しさの餘り涙を流し又聲を發する。

なく

啼（自動四段）　鳥、獸、虫などの聲を發する。

なく

（助動）　打消のぬを延べたる詞。○古今「深山に松の雪だに消えなゝに都は野邊の若菜つみけり」

なぐ

薙（他動四段）　横に切り拂ふ。○「草を薙ぐ」「裾を薙ぐ」

なぐ

和。凪（自動四段）　やはらぐ。●しづまる。●風の吹き止む。●波の立ち止む。●心の靜になる。●怒のをさまる。

なぐ 投(他動下二段) ほふりだす。●打ちつけて捨つる。

なぐりがき (名) 筆を打ちつけて粗暴に書く事。●ぶっつけがき。

なぐる (他動四段) 毆打する。●打擲する。

なぐるさの (枕) 矢を射るには的と射手との間に遠くの距離を置くものゆゑ。投ぐる箭の遠ざかるといふ枕詞。○萬葉「なぐるさの遠ざかりぬて」

なぐはッし 名細(形) 名高き。○萬葉「名ぐはし吉野の山」同「名ぐはし狭岑の島」(又)—なぐはしき。○萬葉「名ぐはしき稲見の海の」

なぐなる (自動四段) 死ぬる。

なくなく 泣々(副) 泣きながら。

なぐや 投矢(名) 投げ飛ばす矢。たゞ矢といふに同じ。○萬葉「なぐやもち千尋射わたし」

なぐこなす 泣兒成(形) 泣く兒の如く。●泣く兒の有樣にて。○萬葉「泣く兒なす慕ひ來まして」同「泣く兒なす言だに問はず」同「泣く兒なす音のみし泣かゆ」同「泣く兒なす行き取り採り」

なぐさに (副) なぐさめに。●心を樂しましむる爲めに。(萬葉)

なぐさむ 慰(自動四段) 樂しむ。●樂しみにする。

なぐさむ 慰(他動四段) 人を弄びて我樂しみに供する。

なぐさむ 慰(他動下二段) 慰ましむる。

なぐさみ 慰(名) 慰む事。●遊び。●遊山。●遊戯。

なぐさめ 慰(名) 慰ましむる事。

なぐさもる (他動) 慰むるの轉。○萬葉「草枕旅の愁をなぐさもる事もあらむと」

なや 納屋(名) 雜物を入れ置く家。●物置。

なや 魚屋(名) 魚賣る家。●肴屋。

なやらひィ 追儺(名) つぬなに同じ。

なやらかか なやらか。●やはらか。●ぐにゃ〳〵。(形)—なやらかなる。○空穗「なやらかなる褶」(副)—なやらかに。

なやらふ (自動四段) 追儺を行ふ。○忠見集「十二月なやらふ雪降る」

なやむ 惱(自動四段) (一)苦しむ。●煩ふ。(二)病む。

なやむ (他動下二段) 惱ましむる。

なやうや (感) 否と諾と。●いやおう。○拾玉集「さ

ぞといはゞ誠にさぞとあご打ちてなやうやといふ人だにもなし」

なやまし 惱(形)。形狀言シク活) 心の惱む有樣。●事の面倒なる有樣。

なやますなやみ 惱(他動四段) 惱ましむる。

惱(名) (一)惱む事。●苦惱。●煩悶。(二)病氣。

なやす (他動四段) 萎えしむる。

なま 生(名) 物のまだ生氣を失ひ果てぬを云ふ。●物事の熟し切らぬを云ふ。●物事の完全せぬを云ふ。

なま (形)(副) 半分。●不充分。●不完全。●いさゝか。●少々。●何とやら。

なまゐ (名) 水草の名。澤瀉(おもだか)の古名。(和名抄)

なまいだ (名) 南無阿彌陀の轉。

なまり 鉛(名) 金屬の名。質柔かく熔解し易きもの。

なまり 訛(名) 訛る事。●訛のある言語。

なまりぶし 生節(名) 鰹節の半熟なるもの。

なまる 訛(自動四段) 言語の正しからぬ發音を爲す。●よこなまる。

なまる (自動四段) 又物の切味の鈍る。●針金などの質の柔かくなる。

なまよみの (枕) 甲斐の枕詞。生弓(なまゆみ)は返り易きものゆゑかへりを約めてかひに言ひ掛けたりとも。生美肉(なまよみ)の貝といふ意なりともいへど確かならず。○萬葉「なまよみの甲斐の國」

なまづ 鯰(名) (一)魚の名。全身滑かにして頭大きく鬚あり。池沼などに棲むもの。(二)地震の異名。……鯰石を見よ。(三)なまづはだに同じ。

なまづいし 鯰石(名) 常陸鹿島神宮にある要石の一名。昔は大地の底に大なる鯰ありて地震の起るは此魚の尾鰭を動かすに因ると想像せり。故に之を抑へ鎭むる爲めの石の意。

なまづはだ 鯰膚(名) 人の皮膚に生ずる斑なる白點。

なまなり 生成(名) 能面の名。女の容貌にして少し角生じ半ば鬼になりたる形に作れるもの。

なまなか (副) 却てせぎりしよりは。●却て跡で後悔するやうに。●なまじい。●なまじひに。(又)—なまなかに。△(形)—なまなかの。(又)—なまなかなる。

なまなま (副) 未熟なる有樣。●煮え切らぬ有樣。(又)

なまくら（名）よく切れぬ刃物。

なまぐさばうず　腥坊主（名）、不品行なる僧。破戒僧。

なまぐさし　腥（形。形狀言ク活）生魚などにある如き一種の臭を感ずる有樣。

なまくび　生首（名）斬りて後まだ時を經ざる人の首。

なまこ　生海鼠（名）海産動物の名。ここに同じ。

なまゑ　生餌（名）虫魚などを生きたるまゝにて與ふる鳥の餌。いきゑ。

なまへ　名前（名）人の名。

なまゑひィ　生醉（名）酒に醉ひたる人。

なまめかし（形。形狀言シク活）なまめく有樣。上品にて風流なる有樣。うつくし。しなやかな。あだな。色めかし。

なまめく（自動四段）色めく。じゃらつく。しなやかに見ゆる。風流に見ゆる。○古今「秋の野になまめき立てる女郎花」

なまし（助動）なんに同じ。又ましに同じ。○古今「今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消ぬずは有りとも花と見ましや」

なまじひィ　懲　なまなか。なまじか。却て跡で後悔せらるゝやうな。（形）—なまじひなる。（副）—なまじひに。

なまじか（副）なまなかに同じ。（俗）

なまじっか（副）なまなかに同じ。（俗）

なます　膾（名）食品の名。魚肉の細く切りたるもの。醋に漬けたる魚肉。刻み大根に魚肉を和し醋にしたるもの。本膳料理などに用ふ。

なまなまに。△（形）—なまなまの。

なまくらなまぐさばうず　腥坊主。破戒僧。

なまくびなまこなまゑ　生海鼠。生餌。

なまへなまゑひィなまめかしなまめく　名前。生醉。なまめく。

なまし　なんに同じ。又ましに同じ。

なまじひィ　懲。

なまじかなまじっかなます　膾。

なまなまに。

なげかはしなげかしなげつるべなげうつなげのなげく

（形。形狀言シク活）なげかしに同じ。

なげかし（形。形狀言シク活）歎くべき有樣。かなし。

なげつるべ　投釣瓶（名）釣瓶に四本の繩を附け二人にて其端を二本づゝ持ち。水を汲み入れては投げやりつゝ田に水をやる器。

なげうつ（他動四段）投げ捨つる。うちやる。

なげの（形）〔一〕無さそうな。無いらしい。○古今「いざ今日は春の山邊にまじりなん暮れなば無げの花の陰かは」〔二〕投げやりの。通り一返の。○源氏「なけのいらへをだにもせさせ給はず」……（又）—なげなる。

なげく　歎（自動四段）〔一〕悲、憂などの有る時に長き息をつく。憂ひ悲しむ。〔二〕歎願する。

なげやり 投槍(名) 武器の名。槍の一種にして投げ付けて敵を傷くるもの。

なげやり 投遣(名) 其儘にして捨て置く事。●うちやらかし。

なげやる 投遣(他動四段) 其儘にして捨て置く。●抛擲する。

なげゑぼし 投烏帽子(名) 折烏帽子の一種。投げたる如く横に折りたるもの。〔圖〕

なげざや 投鞘(名) 毛皮にて造りたる鎗の鞘の末を長く折り返して立てゝ持つ時下に垂るゝやうにしたる物。

なげき 歎(名) 歎く事。●愁傷。●愁歎。●悲歎。

なげし 長押(名) 〔一〕古代の建物にて母屋の上段の間と下段の間との隔の下敷居の處に横に渡したる木。此隔の奥は一段高くして主人客人などの居る室。前は一段低くして目下の者女中などの居る室。○源氏「なげしの下に人々伏して」榮花「なげしの高さ四寸ばかりの程のけて」狹衣「なげしによりかゝり給ひて」〔二〕鴨居の上に横に渡したる木。○「なげしの長刀おっ取りのべて」

なげしまだ 投島田(名) 島田髷の一種。根下りに結ひたるもの。

なふ ナヲと發音する詞はなの部にあり。

なふ ノヲと發音する詞はのの部にあり。

なぶ 並(他動下二段) ならぶに同じ。

なぶる 嬲(他動四段) 嘲弄する。●嘲る。●からかふ。

なごろ (名) なごりに同じ。風の後に猶立つ波。○元眞集「伊勢の海の海士の釣舟春風になごろを高みいかにわぶらん」

なごり 名殘(名) 〔一〕風の風ぎたる後に猶殘りて立つ波。●波の引きたる跡の濱邊に殘る潮水。○伊勢「其夜南の風吹きてなごりの波いと高し」萬葉「難波潟汐干のなごり」〔二〕其物事の過ぎ去りたる後に何となく殘り居る心地のする事。●ざん。●殘り。○新古「風吹かば峯に別れん雲をだに有りしなごりの形見とも見よ」〔三〕別れ。○續古今「今はとて月もなごりや惜しむらん花散る山の有明の空」

なごりやみ 名殘病(名) 大病後の小わづらひ。●餘病。

なごばし（形）　なぐばしに同じ。○倭姫命世記「味酒鈴鹿の山。なごばし忍山と白しき」

なごむ（自動四段）　和らぐ。●穏になる。

なごむ（他動下二段）　和らぐる。●穏にする。

なごん　納言（名）　古代の官名。大中小の三等あり。

なかうど　仲人（名）　〔一〕中人。●媒介人。〔二〕特には結婚の仲立をする人。●媒妁人。

なごやか　やはらか。●なだらか。●おだやか。（形）―なごやかなる。（副）―なごやかに。

なごし　夏越（名）　夏越の祓の略。

なごし　（形。形状言ク活）　なごやかなる有様。

なごしのはらひ　夏越祓（名）　なごしのはらへに同じ。

なごしのはらへ　夏越祓（名）　夏越は借字にて神の心を和し鎮むるの意。六月晦日に行ふ大祓。―水無月祓に同じ。

なごしのつき　夏越月（名）　陰暦六月の異名。

なごす（他動四段）　なごやかに有らしむる。●和らぐる。

なへ　苗（名）　〔一〕植物の芽生。〔二〕特には稻の苗。

なえばむ（自動四段）　衣などのなねて見ゆる。●ぐにゃ〳〵となる。●ぐたくたとなる。○源氏「御衣どもなどなねばみて」

なへどこ　苗床（名）　〔一〕すべて苗を生ひ立たしむる處。〔二〕苗代。

なえなえと　（副）　ぐにゃ〳〵と。●ぐたくたと。

なへぐ　蹇（自動四段）　病などにて足の利かぬやうになる。

なえぐなえぐ　（副）　ぐにゃ〳〵と弱りながら。●ちんば引きつゝ。○盛衰「習はぬ徒歩道なればなねぐ〳〵其日は守山の宿に着き」

なで　（後）　助動詞のな（ぬの變化）と後詞のでと結び付きたる詞。●すして。○新古今「思へ君もねし煙にまがひなで立ちおくれたる春の霞を」

なでかく　撫角（名）　四角の隅々を和かく切り落したるもの。〔圖〕

なでつけ　撫附（名）　ざんざりの髪を少し長くして後ろの方へ撫で附け置く一種の方法。

なでん　南殿（名）　なんでんに同じ。

なでぎり　撫切（名）　撫づるやうに人を容易く切り殺す

事。

なでしこ

撫子。瞿麥(名)　(一)草の名。葉は麥に似て鋸齒の如く端の切れたる花さくもの。其野生にして花の色薄紅に秋咲くものを大和撫子といひ。庭などに植ゑて紅、白、絞りなどに花咲くものを唐撫子といふ。(二)重の色目の名。表紅梅、裏青。

なでしこあはせ

撫子合(名)　中古に行はれたる雅遊の名。左右に味方を分ちて撫子に和歌を附け各趣向の優劣を戰はすもの。

なでもの

撫物(名)　祓をする人の身體をなでゝ罪穢をそれに移し川に流し捨つる具。紙などを切りて人形のやうに造りたるもの。○續千載「御祓川瀨々に出ださんなでものを身に添ふ影と誰かたのまん」

なさる

被成(他動下二段)　爲すの敬語。●爲し給ふ。●下さる。○「御覽可被成候」

なさけ

情(名)　(一)物に感じて動く心。●情愛。●愛。●憐愍。(二)男女の間の情愛。(三)花鳥風月を愛するの情。

なさけだつ

(自動四段)　なさけづくるに同じ。(源氏)

なさけづくる

(自動四段)　情ある風をする。(源氏)

なさけなさけし

(形。形狀言シク活)　情ぶかき有樣。(源氏)

なさけなし

(形。形狀言ク活)　(一)情愛の薄き。●無情なる。(二)つらし。●かなし。●はかなし。(三)風流氣のなき。

なざし

名指(名)　特に其物の名を指し示す事。●指名。●宛名。

なぎ

水葱(名)　水草の名。水葵の類。古へ食用とした るもの。小水葱とも云ひ。又田に生ひたるを田水葱(たなぎ)と云ふ。

なぎ

風。和(名)　風または波の止みたる間。

なぎりはうちやう

柴切庖丁(名)　野菜など切るに用ふる庖丁。先の尖り鈍くしてD字形になりたるもの。

なきがほ

泣顏(名)　泣く時の顏。●泣きそうな顏附。

なきがら

亡骸(名)　屍體。●遺骸。

なきかげ

亡影(名)　亡者の影。●影の如き亡靈。(雅)

なきかず

亡數(名)　亡者の人數の中。○楠正行「梓弓引きかへさじと思ふ身のなきかずに入る名をぞとゞむる」

なきたま 亡魂(名) 死人の靈魂。●迷靈。

なきね 泣寢(名) 泣きながら寢る事。○源氏「泣寢に伏しくらし給ひつ」

なきねいり 泣寢入(名) 〔一〕泣きたるまゝにて寢入る事。〔二〕物事の結局つかずして止む事。

なきな 無名(名) 無實の評判。●虛名。

なぎなた 長刀(名) 武器の名。又は刀の如くにて廣く反り強く。長き柄の端に石突あるもの。中古には武士皆之を用ひ近世にては婦女僧徒のものと爲りたり。

なきごと 泣言(名) 身の上の難澁話し。

なきごゑ 泣聲(名) 泣き出しそうな聲。●涙にうるみたる聲。

なきて (名) 常に秘して置く奥の手。●叶はぬ事をも爲し試むる事。○空穗「中將おりて陵王を折れかへりなきてを舞ふ」源氏「いかで此人のためにはとなき手を出だし」

なきあと 亡跡(名) 人の死したる跡。

なぎさ 渚(名) 海邊にて波の打ち寄する所。

なきめ 泣女(名) 上古葬式の時泣聲を上ぐる役を勤むる女。(記)

なきじゃうご 泣上戶(名) 醉へば泣く癖のある上戶。

なきひと 亡人(名) 死したる人。

なきものぐさ (名) 何も無き事。●無き物を有れかしと欲する心。○拾遺「櫻花わが宿にのみ有りと見れば無きものぐさは思はざらまし」

なゆ 萎(自動下二段) ぐにゃ〳〵となる。●ぐたぐたとなる。●和らかになる。

なゆたけ (名) なよ竹に同じ。

なゆたけの (枕) なよ竹のに同じ。

なゆみ 櫚(名) 鼠を捕ふる器。(和名抄)

なゆ 屧脊(名) 馬具の名。古へ鞍と脊の間に敷くもの。一名はだつけ。

なめ (名) 錢の裏の形なき方。

なめり (句) なるめりの略。○枕「斧の柄も朽ちぬべきなめり」

なめたる (句) 無禮なる。○空穗「あさましくたべ醉ひて對面たまはりけるを如何になめたる樣に侍りけん」

なめらか 滑 すべ〳〵したる有樣。●ぬる〳〵したる有樣。(形)—滑なる。(副)—滑に。

なめくぢ 蛞蝓。蛞蝓(名) 虫の名。蝸牛に似て殼なく甚しき粘液あるもの。

なめげ (名) 無禮。●失禮。△(形)―なめげなる。○枕「言葉なめげなるもの」(副)―なめげに。

なめげさ (名) 無禮さ。○源氏「いかさまにして此なめげさを見じと思しければ」

なめし (形。形狀言ク活) 無禮なる。○枕「文ことばなめき人こそいとゝにくけれ」

なめしがはッ 韋(名) なめして柔かにしたる皮。●造革。

なめす (他動四段) 人工を加へて毛皮を柔かにする。

なみ 波。浪(名) 風の爲めに起る水の運動。

なみ 並(名) 世間並。●普通一般。●通例。●通常。△(形)―並の。(副)―並に。

なみがへし 波返(名) 樂太鼓の打方の稱。青海波の曲に用ふる手。

なみかげ 波陰(名) 波の打ち寄せぬ所。○蜻蛉「波かげの見やりにたてる小松原」

なみかぜ 波風(名) 〔一〕波と風と。〔二〕葛藤。●騷動。

なみかず 並數(名) 人並の數。○後撰「なみかずにあらぬ身なれば住吾の岸にもよらずなりやはてなん」

なみよる 波寄(自動四段) 波の寄るやうに見ゆる。○源氏「御ぐしのなみよりてはら〳〵とこぼれかゝりたるほど」

なみよけ 波除(名) 波を防ぐ爲の堤。

なみだ 涙(名) 泣く時に眼より出づる水。

なみだぼふッし 涙法師(名) 泣き易き小兒。●泣虫○散木「大宮は涙法師となりにけり」

なみだたり 承泣(名) 眼の下の處。(和名抄)

なみだぐむ (自動四段) 涙の催す。●目に涙を持つ。

なみだぐまし (形。形狀言シク活) 涙ぐみたる有樣。

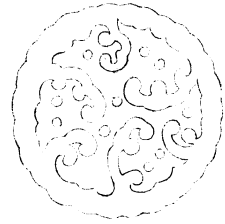
なみながし 波流(名) 鎧の札の名。波の並びたる如き形。(圖)

なみなみ 並並(名) なみに同じ。世間並。●通例。△(形)―並並の。(副)―並並に。

なみなみと (副)こぼるゝ程一杯に。

なみうちぎはッ 波打際(名) 海邊にて波の打寄する所。●渚。

なみのまる 波丸(名) 模様また紋の名。波の形を丸く畫がきたるもの。〔圖一、二〕



なみくら 並藏(名) 立ち並びたる藏。○拾遺「高島やみをの中山柚立てゝ造りかされよ千代の並藏」

なみま 波間(名) 〔一〕波と波との間。〔二〕波の上。〔三〕波の絶間。

なみまくら 波枕(名) 波を枕にして寢る事。●旅泊の枕。○壬二集「古郷を思ひ明石の波枕袖の水に千鳥なくなり」

なみき 並木(名) 植ゑ並べたる立木。

なみせん 涙錢(名) 涙の模樣の畫きたる錢。寛永通寶をいふ。

なみす (他動サ變) ないがしらにする。●輕蔑する。●輕侮する。

なし 梨(名) 木の名。春白き花咲き秋實を結ぶもの。實は水分多くして味甘し。

なし 無(形。形狀言ク活) 有りの反對。●あらず。●見えず。

なし (副) なじかに同じ。なぜ。●何故に。○萬葉「なし來ざるらめ」

なしいろ 梨色(名) 染色の名。●黄色。

なしろ 名代(名) 皇族の御名を後代に傳ふるため一部落の人民に其御名の文字を附け置く事。……若日下部王のために若日下部といふ人民の一部を定め置くの類。(記)

なしばら 生腹(名) 生める母。●生母。(狹衣)

なしに (副) なけれども。●ないのに。○貫之集「思ふ事有りとはなしに久方の月夜となれば寢られざりけり」

なしぢ 梨地(名) 金粉又は銀粉もて梨の實の外皮の如く造りたる蒔繪。

なじる 詰(他動四段) 問ひ詰むる。●詰問する。

なじか (副) なぜか。●何としてか。●いかでか。●如何にしてか。○著聞「馬に乘らんとしけるになじかは乘られん」

なぜジョ**うに** (副) なぜにに同じ。何故に。○空穗「我

なじょの　（形）　もなぜうにかいる目を見るべき」
なぞのに同じ。何の。●如何なる。○謠曲「あれはなじょの翁ごら」

なしつぼ　梨壺（名）　禁中六舍の一つ。昭陽舍の異名。

なしつぼのごにん　梨壺五人（名）　村上天皇の天德年中勅を奉じて梨壺に出勤し後撰集を撰定せし五人の歌人。大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城。

なじむ　馴染（自動四段）　馴れ親しむ。●なれ〳〵しくなる。

なしうち　梨打（名）　梨打烏帽子の略。

なしうちえぼし　梨打烏帽子（名）　揉烏帽子の一種。なしうちの意にて柔かに作り兜下に着用するもの。〔圖〕

なしえ　梨繪（名）　梨地に繪をかきたるもの。

なじみ　馴染（名）　馴染む事。又は馴染みたる人。

なびく　靡（自動四段）　〔一〕輕き物の風の吹き行く方に撓む。〔二〕從ふ。●服する。●他の心任せになる。

なびきば　靡葉（名）　風に靡く葉。○夫木「夕されば池の蓮のなびきばに露吹きわたる風ぞ涼しき。

なびきも　靡藻（名）　波に靡く藻。○新後拾遺「思ひ川いつまで人になびきもの下に亂れて逢瀬待つらん」

なも　なんの古言。〔そに同じ。○續紀宣命「天地の御恩を報い奉るべしとなも思ほしめすと詔ふ（天皇が大命を）」

なも　（後）

なもうだ　（感）

なせ　（名）　南無阿彌陀の轉。〔なまいだに同じ。

なせ　汝兄（代）　男兄弟を親しみ呼ぶ詞。●夫を親しみ呼ぶ詞。●又たゞ男子を親しみ呼ぶ詞。（古）

なぜ　（副）　なにゆゑ。●何の譯で。

なぜに　（何）　何故に。●何の譯で。（空穗）

なす　茄子（名）　なすびに同じ。

なす　生（他動四段）　產む。●生ずる。○「子をなす」

なす　爲（他動四段）　形を變へしむる。●變ぜしむる。●移す。

なす　成（他動四段）　成就さする。●仕遂ぐる。

なす　鳴（自動四段）　鳴らす。○記「少女のなすや板戸を」

なす　（自動四段）　寢る。○萬葉「奥山の愼の板戸をこゞとして我開かんに入り來てなされ」同「われを待つとなずらん妹を行きて早見ん」

なす　（副）　の如く○萬葉「入日なずかくれにしかば」

なすり　納蘇利（名）　雅樂の曲名。なそりなっそりなふそりに同じ。

なする　（他動四段）　擦りつくる。●塗りつくる。

なずらひ　準（名）　比較。●類似。（雅）

なずらふ　準（他動下二段）　なぞらふに同し。

なずらふ　準（自動四段）　なぞらふに同じ。

なすび　茄子（名）　畑に作る植物の名。玉子形にして濃き紫色の實なるもの。食用として世に珍重せらる。